奥野田小学校

「伝え合い，学び合う児童の育成」

～学級集団づくりを通して～

Ⅰ　研究の内容

1　研究仮説

学級集団の力を高めるための取り組みを工夫していくことで，互いを認め合える関係がはぐくまれ，互いに学び合う子どもが育つだろう。

2　研究の方法と内容

（1）授業研究

研究授業（低学年ブロック，高学年ブロック各１本）

一人一実践授業

（2）テーマに関わる学習会

（3）特別支援教育の研究

（4）Ｑ－Ｕの実施と分析・活用の充実

（5）今日的教育課題関連の学習会

3　研究実践

（1）学習会

ア　「Ｑ－Ｕの分析法について」

講師　塩山中学校教諭　藤原祐喜先生

イ　学級集団の力を高めるための取り組みについての学習会

（2）特別支援教育の研究

「子どもの見取りと支援の方法について」

講師　市障害者地域支援センター　精神保健福祉士　服部森彦先生

（3）研究授業

ア　低学年ブロックの研究

２学年国語「うれしいことば」　植原恵子教諭

指導助言　峡東教育事務所　宮澤洋一指導主事

イ　高学年ブロックの研究

５学年学級活動「話し方について考えよう」　前島国学教諭

指導助言　義務教育課副主幹　樋川和之指導主事

（4）授業実践

ア　１学年道徳「しっぱいしたって」　武井麻子教諭

イ　３学年道徳「心をつなぐ言葉」　中根絵里教諭

ウ　３学年体育「フラフープと仲良くなろう」　相川和彦教諭

エ　４学年学級活動「伝え方について考えよう」　堀井ますみ教諭

オ　６学年総合的な学習の時間

「ポスターセッションをして伝え合おう聞き合おう」　山縣重人教諭

カ　すみれ学級「乗り物に乗って出かけよう」　丸田みどり教諭

Ⅱ　成果と課題

1　成果

・学力向上のためには，集団の質の向上が不可欠である。学校教育の本質に即した適切な研究主題，仮説であった。

・学級集団を高めるための指導を重ねたことにより，学級としてのまとまりができ，互いの良さを学び合う素地ができた。

・日常的に研究主題を意識した教育実践がなされ，個々の授業力を高めるために，全員の授業実践ができたことは成果につながった。

・学級や学年の実態，発達の段階に応じた工夫した学級づくりの取り組みがなされ，学級集団としての力の向上が見られた。

・授業実践や日常の取り組みを通して，子どもたち自身がお互いの関係をよくしていくにはどうすればよいのかを考え，自分自身を振り返る機会とすることができていた。

・Ｑ－Ｕ検査の結果の分析法や活用法についての学習会は，Ｑ－Ｕを学級経営にどう生かしていけばいいのかという指針となった。

・研究会でＱ－Ｕ検査の分析をすることにより，支援を要する児童への対応の仕方など共通理解を図ることができた。また，低・高ブロックごとの研究会では，学級だけでなく，ブロックとしての発達における特徴やそれを解決するための方策を出し合うことができた。

・Ｑ－Ｕ検査の結果からは，要支援群から向上した児童が見られたり，学校生活，友だち関係での不満や不安を感じる児童が減ったり，満足群に属する児童が増えたりするなど取り組みの成果が見られた。

2　課題

・目指す子ども像にまだ十分に到達していない児童がいるので，Ｑ－Ｕ検査の結果等を参考にいろいろな取り組みを考えていく必要がある。すぐに成果を出すことは難しいが，学校全体で共通理解を図りながら継続して取り組んでいきたい。

・学習したことを日常の生活の中に定着させることは簡単なことではない。一層の取り組みや更なる工夫をしていきたい。

・学習集団の力が高められたとはいえ，まだ十分に到達していない面も見られるので，さらに研究を進めていきたい。

Ⅲ　成果物

1　研究授業，授業実践の指導案８点

（研究主任　武井麻子）